

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): the children's cafeteria, operaton staffs, users, reasons for use 作成者: 藤枝, 静暁 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1436

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした 利用理由に関する調査

Survey on the Reasons of Use for Operation Staff and Users of the Children's Cafeteria

藤 枝 静 暁

FUJIEDA, Shizuaki

問題と目的

社会の課題の一つに子どもの貧困がある。国も対策を始めており、2013年に子どもの貧困対策に関する法律が成立し、各自治体が子どもの貧困対策についての計画を策定する必要があることが記された。その後、2014年に内閣府は子共の貧困対策に関する大綱を公表し、2019年に見直しが行われ、新たな子共の貧困対策に関する大綱が公表された。

こうした法整備を受け、社会でも子どもの貧困対策が行われている。その一つが、NPO法人等が運営する子ども食堂である。「子ども食堂」の厳密な定義は無く（町田・長井・吉田, 2018）、子どもだけでも行けて、無料や安い価格で食事ができる（朝日小学生新聞, 2018）、安価な料金あるいは無料で、子どもや親子に食事を提供する場（天野, 2016）、子どもが一人で来られる無料または定額の食堂（NPO法人むすびえ, 2020）等がある。本研究では、子ども食堂とは、子どもあるいは親子を対象として、無料あるいは安価で食事の提供を受けることができる場所と定義する。

このような食堂を指す名称は複数あり、統一されていない。たとえば、文部科学省のHP内では「こども食堂」、「子ども食堂」、「子供食堂」と3パターンの呼称が使われている。本研究では、朝日小学生新聞（2018）、NPO法人むすびえ（2020）の表現にならない、「子ども食堂」と記載する。

子ども食堂の発足は2012年であり、2016年には全国で約300カ所であったのが、2020年には約5000カ所に急増し、新型コロナウイルス感染症が流行した2020年以降においても、少なくとも186カ所が新設されている（NPO法人むすびえ, 2020）。こうした事実は、社会における子ども食堂へのニーズが高まっていることの現れと考えられる。

子ども食堂の草創期からその運営に関わっている湯浅（2019）は、子ども食堂は地域共生社会の実現に向けて大きな役割を果たすことが期待されると指摘する一方で、依然としてさまざまな誤解や偏見にも取り巻かれていると指摘し、子ども食堂の社会的意義、機能を再確認することの重要性を指摘している。湯浅（2019）は、子ども食堂の機能として「地

キーワード：子ども食堂、スタッフ、利用者、利用理由

Key words : the children's cafeteria, operaton staffs, users, reasons for use

域交流拠点」と「子どもの貧困対策」の2つを挙げている。

吉田（2016）は、子ども食堂に求められるものは何かを明らかにするために、文献、子ども食堂が必要とされる貧困をはじめとする社会的背景、それに対して国が進める施策、子ども食堂として展開される実践事例等を整理した結果、子ども食堂には、「食を通じた支援」、「居場所」、「情緒的交流」の3つの機能があると述べている。

町田ら（2018）は、子ども食堂のスタッフを対象に、自由記述法を用いて、子ども食堂の効果を検討した。町田ら（2018）は、全国の120カ所の子ども食堂から寄せられた回答を基に、グラウンテッド・セオリーの手法を参考に分類し、子ども食堂の効果として、【子ども・保護者の生きる力の向上】、【子ども・保護者の気分の改善】、【子ども・保護者・地域住民の充実感の向上】、【子ども・保護者・地域住民の生活全般の改善】、【子ども・保護者・地域住民の食生活の改善】、【保護者の育児状況の改善】、【子ども・保護者・地域住民のつながり促進】、【子どもの防犯】、【地域づくり】の計8つを挙げている。スタッフは、子ども食堂を利用する子どもや保護者と実際に関わっているだけに、これらの結果には一定の妥当性があると考えられる。

上記のように、研究者や子ども食堂のスタッフから見た子ども食堂の機能が明らかにされている一方で、利用者が子ども食堂の機能をどのように捉えているか、つまり、利用理由を明らかにした研究は見当たらない。しかし、子ども食堂の数が増加している事実から、子ども食堂を必要としている人、あるいは、継続的に利用している人が増えていると考えられる。それだけに、利用者が子ども食

堂を利用する理由を明らかにすることは、子ども食堂の社会的意義、機能の一端を明らかにすることにつながると言える。また、既存の子ども食堂の運営の継続、あるいは、子ども食堂を今後新たに開設する際の参考にもなるだろう。

以上より、本研究の目的は、子ども食堂の利用者を対象として、利用理由を明らかにすることである。町田ら（2018）にならい、子ども食堂のスタッフも対象に加え、両者の意識に違いがあるのかも明らかにする。子ども食堂の利用者の年齢構成は、18歳以上の大人よりも、18歳未満の子どもの方が多く、子どもの中でも未就学児と小学生が、中学生と高校生よりも多い（農林水産省, 2018a）。未就学児や小学生が利用者の場合、アンケート調査への回答が難しい場合もあることから、その保護者を対象とする。スタッフに対するアンケート調査を研究1とし、保護者に対するアンケート調査を研究2とする。

調査対象とする子ども食堂は、埼玉県A市にあるB食堂である。令和3年4月1日時点のA市の世帯数は約10万世帯、人口は約23万人である。B食堂は2016年9月に開設され、週に1度開催している。

B食堂の会則では、「こどもの貧困やこどもの孤食について問題意識を持ち、こどもが地域で安全に過ごすことができる居場所をつくる。一緒に食事をしたり、おしゃべりをしたりする中で異年齢のコミュニティをつくり、地域で顔の見える関係から、安心して育っていける環境をつくることを目的とする。」と定めている。

本研究の倫理的配慮として、調査開始前に、B食堂の代表者に研究の主旨および内容を伝え、了承を得た。研究1および研究2の調査

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

協力者への配慮として、アンケートへの回答は無記名であること、回答は任意であること、答えたくない項目は回答しなくても良いこと、回答を途中で止めてもよいこと、回答結果は誰にも見せないことを、口頭とフェイスシートで説明し、同意を得た。調査協力者は回答終了後、自ら封筒に入れ、封をした上で提出した。アンケート調査に対する質問や苦情は無かった。

研究 1

目的

B 食堂のスタッフは、B 食堂の利用者の理由をどのように考えているのかを明らかにすることが目的である。また、スタッフとしての活動状況、スタッフの世の中の「子ども食堂」に対する認識なども併せて尋ね、明らかにする。

方法

調査場所・日時

アンケート調査は B 食堂で 2019 年 9 月 4 日・11 日・18 日の 3 日間実施され、回収期間は 9 月 11 日・18 日・25 日の 3 日間であった。いずれも、B 食堂が運営されている日であった。

調査対象者

調査対象者は B 食堂のスタッフである女性 10 名、男性 1 名の計 11 名であった。

調査項目

研究者と B 食堂でボランティアをしている大学生 1 名が項目内容を検討し、以下のよう

に決定した。

問 1 あなたの年齢層を教えてください

(20 30 40 50 60 70) 代
問 2-1 いつから参加していますか

20 () 年 () 月

問 2-2 現在はどのくらいの頻度で参加していますか

毎回 月 1 回 月 2 回 月 3 回

問 3 ボランティアに参加する以前から B 食堂を知っていましたか

はい いいえ

問 4 参加し始めた理由またはきっかけはありますか

()

問 5 一般的な世の中の「子ども食堂」を知っていましたか

はい いいえ

問 6 B 食堂でのボランティア活動は楽しいですか

はい いいえ

理由を具体的に教えてください

()

問 7 B 食堂での活動は大変ですか

はい どちらでもない いいえ

「はい」か「いいえ」を答えた方はその理由を具体的に教えてください

()

問 8 利用者が B 食堂を利用する理由について何が考えられますか

当てはまるものに○をつけてください（複数回答可）

家庭環境（一人親等） 経済面でゆとりがない

ご飯がおいしい 皆で食べられる

他学年と関われる 他の子の様子ที่わかる

遊び相手がいる

親同士の交流ができる

ご飯を作らなくて済む

スタッフと関われる 近所だから

その他（ ）
 問9 社会の中で「子ども食堂」は必要だと思いますか
 はい いいえ

結果と考察

調査を依頼した11名全員から回答を得た。
 問1でのスタッフの年齢層は20代が1名、50代が3名、60代が5名、70代が2名であった。以上より、スタッフの年齢層は60代以上が最多であり、子育てを終えた人あるいは仕事を退職した人が中心となっている様子がうかがえた。
 問2-1でスタッフがB食堂にボランティアとして参加した時期は、設立当初の2016年9月からが7名、2016年10月からが2名、2017年7月からが1名、2017年8月からが1名であった。以上のことから設立当初から参加している人が多いことが明らかになった。
 問2-2でのスタッフのB食堂への参加頻度は月1回参加している人が0名、月2回参加している人が1名、月3回参加している人が2名、毎回参加している人が8名であった。
 問2-1と問2-2より、スタッフのうち、

約8割がB食堂の開始当初から参加しており、かつ、約7割が毎回参加していることにより、スタッフ同士の間に関心感が生まれ、さらに活動がしやすくなっていると考えられる。

問3でのボランティアに参加する以前からB食堂を知っていたかについて、「はい」が5名、「いいえ」が4名、「未回答」が2名であった。スタッフの半数弱は、以前からB食堂を知っていたのである。

問4でのB食堂のボランティアに参加し始めたきっかけを自由記述で尋ねた結果を表1にまとめた。きっかけの多くは、発起人を通じてであったことが分かる。

問3と問4の結果を合わせて考えると、スタッフの中には、B食堂の存在は知らなかった方もいるが、発起人とは既知の関係であり、発起人から誘われたことをきっかけとして参加し始めたと考えられる。市の広報をきっかけとして参加し始めた方もおり、市の広報による効果の一端と言える。ただし、広報と比べると発起人を通じて参加したスタッフが多かったことより、広報のみでは、B食堂がどのような場なのか、または、ボランティアの内容が伝わりづらく、参加への意思決定の材

表1 参加し始めたきっかけ

発起人を通じて	退職し暇だったところに声をかけられたから 仲間が立ち上げるので手伝って、今に至る 母を手伝うのをきっかけとして始めました たまたま発起人と知り合いだったので彼女の熱意に賛同した うちの近くでもあったらいいのかな…と思っている時に一緒にやりませんか？と誘われたから 友人に声をかけていただいて 元々興味があったのですが、友人に誘われて 社会的弱者である「子ども」たちが気軽に自分らしくいられる場を作りたいと思った 知人の熱意と行動に少しでも参加して子どもたちが笑顔になる場所である事を望みます
市の広報を通じて	市の広報に掲載あり 高齢者向けのボランティア活動をしており、子供に関わる何かをしたいと思っていた時にボランティア連絡会が実施した市内ボランティア交流会で「B食堂」の人手が不足しているを知り、即活動を始めました

* 仲間・友人・知人・母は発起人を指す

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

料としては不十分な可能性がある。

問5での一般的な「子ども食堂」を知っていましたかの問いについては、「はい」が91% (10名)、「いいえ」が9% (1名)であった。知っていると回答した人が多かったことから、B食堂のスタッフにおいては、一般的な子ども食堂への認知が高いことがわかる。つまり、子ども食堂の存在を知っていたことが、B食堂のボランティアへの参加を決める、促進要因の一つであった可能性がある。

問6でのB食堂でのボランティア活動は楽しいかについては、「はい」が91% (10名)、「いいえ」が9% (1名)であった。9割以上のスタッフがB食堂でのボランティア活動を楽しんでいる一方で、楽しめていないと感じているスタッフがいることも明らかになった。

表2にその理由を記した。楽しいと回答した理由の多くは、子どもとの関わりが楽しい、子どもの喜ぶ表情が嬉しいといったことであった。また、人の役に立てる、同僚スタッフの手際の良さ、母親達がホッとできる場所

になっているといった意見もあった。スタッフの年齢層を踏まえて考えると、スタッフ自身の子育ては終わっているが、子どもへの関心と子育てを支援したいという気持ちがあり、B食堂に通ってくる子ども達との関わりを楽しんでいると考えられる。

「いいえ」と回答したスタッフは、車の運転や荷物運びなどの役割を担っており、子どもとは関わっていない様子がうかがえる。それが、楽しいとは感じない結果につながったのかもしれない。B食堂の運営を考えると、車の運転や荷物運びは、縁の下の力持ちとしての重要な役割である。また、スタッフとして参加している事実から、活動を楽しんでいるとは思っていないものの、自己有用感など別のポジティブな感情を持っている可能性がある。

問7でのB食堂での活動は大変かについては「はい (大変である)」が9% (1名)、「いいえ (大変ではない)」が73% (8名)、「どちらでもない」が18% (2名)であった。以上のことから、スタッフの約7割がB食堂での活動を大変ではないと捉えている一方で、大変

表2 ボランティア活動が楽しい理由

楽しい	子どもとの関わり	子ども達と触れ合えるのが楽しい 子ども達の成長が楽しみ 子ども達と遊んだり、おしゃべりしたり一緒にいられることがとにかく幸せです。一緒に「B食堂」を支えてくれる仲間がいることが幸せです。 「はい」と答えたが楽しいことばかりではないと思っています。子ども達と触れ合っていることは本当に楽しい 子ども達と触れ合い、折り紙、ジグソーパズル等喜ぶ顔がうれしくて 子ども達の嬉しそうな顔が見れてこちらも幸せになります 世の人の為に少しでも役に立てる事ができると考えられるから 子ども達の成長と笑顔、ちょっとした甘えに自己満足しています スタッフの手際の良さは感心します。子ども達がおいしいと言って食べている様子は嬉しく、ママ達もホッとできているようで良かったなと思います
	その他	できる人ができる場所でそれぞれのスキルに合わせて和気あいあいと活動ができている
楽しくない		手伝いは車の運転や荷物運びなどなので楽しさなどは特に感じない

だと感じているスタッフもいることが分かった。

その理由を記した表3を見ると、スタッフ同士が協力しあうことで、それぞれが無理なく活動を続けている様子が推測できる。また、気持ちの面でも、スタッフ同士がお互いに素敵な存在、高め合える存在と認識しており、ポジティブな感情を抱いていることが分かる。

「はい=大変である」の内容は、「子ども達の安全の確保とリスクを考えた上での設定と運営上のマネージメント」であった。実際、子ども食堂を運営する根底には安全と安心の確保、および、運営し、開催できることが保証されていなければならないだけに、「大変である」との回答は妥当である。なお、NPO法人むすびえ（2020）、農林水産省（2018a）の調査結果においても、これらの内容は、子ども食堂を運営する上での「課題」「困りごと」として挙げられており、各地の子ども食堂に共通の課題であると言える。

問8で利用者がB食堂を利用する理由について複数回答で尋ねた結果を表4に記した。複数回答の最少は3個であり、最大は12個と幅があった。4個、5個、11個、12個を選択

したのは各1名（9%）、6個、10個が各2名（18%）3個は3名（28%）であった。

表4の通り、最も多かった理由は「皆で食べられる」と「親同士の交流ができる」であり、9名が選択した。2番目に多かった理由は「ご飯がおいしい」であり、8名が選択した。3番目に多かった理由は「ご飯を作らなくて済む」であり、7名が選択した。最も少なかった理由は「スタッフと関われる」と「その他」であり、それぞれ3名が選択した。「その他」として挙げられたのは、「子どもが大きな声を出しても気がねなくすごせる場だから」、「リピートする事で子どもも親も居場所を見つけられていると思う。安心を感じてくれていると思う」、「泣くことや子供同士のトラブル、その子がやりたいことなどに対して、まずは見守るという環境を作る努力をしている。自分で考え行動することを優先させていいという場の雰囲気」であった。

最多理由の「皆で食べられる」、「親同士の交流ができる」から、スタッフは、母親はB食堂に親同士のコミュニケーションを求めて来ていると考えていることが分かった。この結果は、先行研究と一致していた。2番目に

表3 活動は大変かについての自由記述回答

	仲間との活動は色々な意味でお互いを高めあっていける 社会問題に目を向けて自分にできることを見つけるきっかけとなる
	行う手伝いが比較的簡単な事に加えて大学のサークルでもボランティアを行っているのに苦に感じたことはありません
いいえ=	本人の無理のないところでの活動なので大変と思った事がない
大変では	楽しく過ごす時間、皆様の喜びが自分自身の喜びに返ってきている 一緒に楽しんでいます
無い	素敵な方々と活動ができているから
	スタッフ全員で協力して行っている
	自身の時間を融通することでお手伝いができるのですから… 自分次第だと思います
	事前に下ごしらえ等してくださるのでスムーズにできています
はい=大	子ども達の安全の確保とリスクを考えて場所や時間の設定、人の配置などをマネージメントすること
変である	に神経を使うため

多かった理由は「ご飯がおいしい」であった。家族が共に食事をとりながらコミュニケーションを図ることは、食育の原点であり、食の楽しさを実感するだけでなく、食や生活に関する基礎を習得する機会になる（農林水産省, 2018b）と指摘されているものの、以前から、核家族化の進行、共働きの増加などの理由から家族が一緒に食事をする共食の機会が減少すると共に、子どもの孤食が増加していることが社会的問題となっている（石井・上島, 2017）。こうした問題に対して、B食堂を運営しているスタッフは、B食堂には共食ができる場を提供する機能があり、それが利用理由になっていると考えているのであろう。

3番目に多かった理由は「ご飯を作らなくて済む」であった。スタッフ自身も主婦経験があるからこそ、母親が週1回でも「ご飯を作らなくて済む日」があれば助かると考えたのであろう。

最も少なかった理由は「スタッフと関われる」と「その他」であった。つまり、スタッフ自身は、子ども同士や親同士の交流と比べるとスタッフとの関わりは、利用する理由にはならないと考えていることが分かった。

「その他」の内容から、スタッフの中には、子どもが大きな声をだせるという一般家庭では難しいことが出来る場所、親子共に安心して過ごせる場所、子どもの自立を見守ることができる場所であることを理由と考えていることが分かった。

問9での社会の中で「子ども食堂」は必要かについて「はい」と答えたのが10名（91%）、「いいえ」と答えたのが0名（0%）であった。「未回答」が1名（9%）いた。子ども食堂のスタッフは、ほぼ全員が、必要と考えていることがわかった。実際に子ども食堂のス

タッフとしてボランティアに参加しているからこそ、必要性を強く感じているといえる。

研究2

目的

研究2の目的は、B食堂を利用している子どもの母親を対象に、B食堂を利用する理由を明らかにすることである。また、B食堂を利用する頻度、B食堂での子どもの様子等も明らかにする。

方法

調査場所・日時

研究1と同じであった。

調査対象者

B食堂を利用した子どもの母親18名であった。全員が日頃からB食堂を利用している母親であった。

調査項目

B食堂を利用する子どもの母親の実態と意

表4 B食堂を利用する理由

スタッフ n=11		母親 n=18	
人数	割合	人数	割合
9	82	12	67
6	55	11	61
7	64	10	56
6	55	10	56
8	73	8	44
5	45	7	39
3	27	7	39
4	36	5	28
5	45	3	17
9	82	5	28
5	45	2	11

*網かけはスタッフと母親間で選択数の差が無かった項目

識について把握するため、研究1と同様に、研究者と子ども食堂でボランティアをしている大学生1名が項目内容を検討し、以下のよう

に決定した。

問1 あなたの年齢層を教えてください

(20 30 40 50 60 70)代

問2 普段、「B食堂」を利用しているお子様の年齢を教えてください

()才 ()才

()才

問3 B食堂を利用し始めたきっかけに○をつけてください(複数回答可)

知り合いからの紹介

社会福祉協議会のHPを見て

口コミ チラシを見て

立て看板を見て 子どもを通して

その他()

問4-1 いつから利用していますか

20()年()月

問4-2 どのくらいの頻度で利用していますか

毎回 月1回 月2回 月3回

問5 B食堂を利用する以前から、「B食堂」を知っていましたか

はい いいえ

問6 B食堂の目的はご存じですか

はい いいえ

問7 一般的な世の中の「子ども食堂」の存在はご存じでしたか

はい いいえ

問8 B食堂を利用する理由はありますか(複数回答可)

家庭環境(一人親等)

安く食べられる ご飯がおいしい

皆で食べられる 他学年と関われる

他の子の様子がわかる 遊び相手がいる

スタッフと関われる ご飯を作らなくて済む
親同士の交流ができる 近所だから

その他()

問9 お子様のB食堂での様子について教えてください

ご家庭での様子と比較して、当てはまるものに○をつけてください

9-1 おかわりをする

する しない

9-2 機嫌のよさ

良い 悪い

9-3 口数

多い 少ない

9-4 表情の豊かさ

豊か 豊かではない

9-5 B食堂を利用した日の就寝時間

早く寝る 早く寝ない

9-6 その他を自由記述にて回答

問10-1 B食堂の良いところを教えてください

()

問10-2 良くしてほしいところがありますか

()

問11 社会の中で「子ども食堂」は必要だと思いますか

はい いいえ

結果と考察

調査を依頼した18名全員から回答を得た。

問1の結果、母親の年齢層は30代が10名、40代が7名、50代が1名であった。B食堂を利用している母親の年齢層は30代から40代が中心であることがわかった。

厚生労働省(2020)の「令和元年人口動態

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

統計」によると、第一子、第二子の出産時の母親の年齢は30歳から39歳が最多であることから、問1の結果は妥当と考えられる。20代の母親がいなかったこと理由の一つには、近年増えている晩婚化の影響があると考えられる。50代の母親に関しては、第1子ではなく、第2子以降の子どもがB食堂を利用しているのかもしれない。

問2より、普段からB食堂を利用している子どもの年齢層は、未就学児が10名、低学年が児童14名、中・高学年児童が6名であった。最年少は0歳（1名）であり、最年長は11歳（1名）であった。最も多いのは、7歳（7名）であった。以後、順に4歳（4名）、6歳（4名）、9歳（4名）であった。

また、母親1名につき、利用する子どもの人数は1人が39%（7名）、2人が56%（10名）、3人が5%（1名）いた。2020年の合計特殊出生率は1.34人であった（厚生労働省, 2021）ことを踏まえると、B食堂の利用者の家庭は、平均よりも多くの子どもを養育していることが分かる。

低学年児童に次いで未就学児が多い理由については、未就学の弟妹がいる場合、弟妹を家に残し、就学児だけを連れて来ることはできないので、母親はきょうだいを連れてくると考えられる。中・高学年児童数よりも低学年児童数が多い理由について、親の立場から考えると、低学年の子どもだけでB食堂へ行くことは不安であり、親子でB食堂に来ると考えられる。子どもの立場で考えると、低学年から高学年へと進むにつれて、心理的自立が進み、次第に親と一緒に行動することが少なくなる（塩崎, 2012）。また、10歳あたりを境として、子どもと親の関係が変化し、親よりも友情の重要性が増す（渡辺, 2011）。こう

した学年毎の発達上の違いも一因となり、親と一緒にB食堂に来ている高学年児童の数は少ないと考えられる。

問3でB食堂を利用し始めたきっかけは、1個のみ選択した者は15名、2個選択した者は2名、未回答者が1名であった。

利用し始めたきっかけは、「知り合いからの紹介」が9名、「チラシを見て」が6名、当日のみ出す「立て看板を見て」が6名、「子どもを通して」と「口コミ」が各1名、「社会福祉協議会のHPを見て」と「その他」は共に0名であった。

つまり、B食堂を利用し始めたきっかけは、「知り合いからの紹介」が多いものの、「チラシ」「立て看板」といった媒体の効果も大きいことが分かった。他方、社会福祉協議会を介してはゼロという結果から、一般の家庭では、社会福祉協議会のHPを見ることは少なく、B食堂の存在までたどり着くことは少ないことが示唆された。

問4-1でのB食堂を利用し始めた時期は設立当初の2016年10月からが2名、2017年からは6名、2018年からは7名、2019年8月からが3名であった。つまり、B食堂の設立当初から利用者はおり、その後、利用した人の紹介やチラシなどの媒体を通して、利用者が増えたと考えられる。

問4-2でのB食堂の利用頻度は月1回が5%（1名）、月2回が17%（3名）、月3回が17%（3名）、毎日が56%（10名）、未回答が5%（1名）であった。つまり、回答者の半数強がB食堂を毎週利用し、9割以上が毎月利用していることがわかった。農林水産省（2018a）が全国274カ所の子ども食堂を対象に行った調査では、開催頻度は月に1度が最多であり、週に1度の開催は約1割であった。

したがって、週に1度開催していることはB食堂の特徴であり、それゆえに、利用者はB食堂を習慣的に利用しているのかもしれない。

問5でのB食堂を利用する以前から知っていたかについては、「はい」が6名(33%)、「いいえ」が12名(67%)であった。現在、B食堂を利用している母親の約7割は、利用するまではその存在を知らなかったのである。

問6でのB食堂の目的を知っていますかについては、「はい」が94%(17名)、「いいえ」が6%(1名)であった。回答者の9割以上がB食堂の目的を知った上で利用していることがわかったが、利用開始当初から知っていたのか、利用するうちに知ったのかは不明である。この点を区別して明らかにすることは、今後の課題である。

先述の農林水産省(2018a)の調査結果では、子ども食堂の運営上の困りごとの一位が「来てほしい家庭の子供や親に来てもらうことが難しい」であった。つまり、利用者が子ども食堂の目的を理解した上で利用しているとは限らず、それが課題となることもあるのである。この課題を解決するためには、利用開始前、あるいは、利用開始後早い段階で、子ども食堂の目的を周知し、理解してもらう必要があるだろう。

問7での一般的な世の中の「子ども食堂」を知っていたかについて「はい」83%(15名)、「いいえ」が17%(3名)であった。以上のことから8割の人が一般的な世の中の「子ども食堂」を知っていたことがわかる。この結果は、全国の16~79歳の男女約1万人を対象としたインターネット調査結果において、子ども食堂の認知度が約85%であったという結果(株式会社インテージリサーチ, 2020)と同様であった。

問5の結果と問7の結果を併せると、インターネット、TV、新聞等のメディアを通じて、「子ども食堂」の存在は一般的に知られてきていると言える。しかし、子ども食堂が自分の生活圏内にあることに気がついていない場合もあることが分かった。

問8でのB食堂を利用する理由(複数回答)の結果を表4に記した。最少は0個であり、最大が10個であった。1名が選択0個であったが、「その他」に記入していた。2個は3名、3個は4名、4個は3名、5個と6個は共に1名、7個は3名、9個は1名、10個は1名であった。

表4の通り、理由のなかで、最も多かったのは「皆で食べられる」であり、12名が選択した。2番目は「遊び相手がいる」であり、11名であった。3番目に多かった理由は「ご飯を作らなくて済む」と「近所だから」であり、それぞれ10名が選択した。最も少なかった理由は「家庭環境(一人親等)」であり、2名が選択した。

B食堂を利用する理由の最多は「皆で食べられる」であり、2番目は「遊び相手がいる」であった。つまり、母親はB食堂にコミュニケーションを期待して利用していることが分かった。この結果も先行研究と一致していた。3位は「ご飯を作らなくて済む」であった。やはり、母親にとって、「ご飯を作らなくて済む」日があるということは、ありがたいことなのであろう。同順位は、「近所だから」という理由であった。母親が、乳幼児あるいは低学年の子どもを連れてB食堂を利用する際には、家からの距離が重要な要素の一つであり、家から近い位置にあるということは利用を促進させる要因になっていることが分かった。最も少なかった理由は「家庭環境(一人親等)」

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

である。

問8の「その他」の理由を表5に記した。その他の理由においても、子どもが「仲間と関わることができる」「人と関わりながらおりがみをする楽しさ」、また、大人が「地域と関われる場である」ことが挙げられている。シングルマザーにとっては、B食堂が、家庭と職場以外の息抜きができる第三の居場所として機能していることが明らかになった。

問9では、B食堂と家庭での子どもの様子の違いを尋ねた。まず、おかわりを「する」が2名、「しない」が16名であった。約9割が「しない」のは、子どもは、皆が食べられるようにと考えているのかもしれない。または、子どもは友達や大人との関わりが楽しく、おかわりすることを思いつかない、あるいは、おかわりするよりも遊びたいという欲求が強いためかもしれない。

機嫌が「良い」が17名、「悪い」が1名であった。9割以上が、家庭よりもB食堂の方が機嫌良く過ごしている様子がわかる。これは、B食堂が単に食事をする場所にとどまらず、仲間と関わることができる場所であるからであろう。

口数が「多い」は13名、「少ない」が5名であった。表情が「豊か」が17名、「豊かではない」が1名であった。9割の子どもがB食堂

で表情豊かに過ごしていることがわかる。したがって、B食堂には仲間や大人がいることから、子ども達の大半は、家庭よりもB食堂において、楽しく過ごしている様子がうかがえる。

就寝時間は、「早く寝る」が8名、「早く寝ない」が8名、「未回答」が2名であった。B食堂を利用して疲れて早く就寝する子どもと、コミュニケーションをたくさんして興奮し、就寝が遅くなる子どもと半々なのかもしれない。

問10-1でのB食堂の良いところに対する回答を表6に記した。一人の回答に複数の内容が記載されているので、厳密な区分は難しいものの、回答を「子どもにとっての良いところ」と「母親にとっての良いところ」の2つに大別した。前者からは、「子ども同士の関わりが持てる」「友達と一緒に食事ができる」「栄養バランスが良い食事」といった回答があり、B食堂ならではの長所と言える。後者は、「週1回、ご飯を作らなくて済む」「いろいろな世代の方と交流できる」「家事育児からの気分転換」などがあり、B食堂を利用する日は、夕飯を作らないで済むので、その分の時間や体力を子どもとの関わりに充てることができるなど母親の心のゆとりにつながっていることがわかる。また、母親にとって、

表5 問8のその他の理由

	子どもが喜ぶから
人との関わり、遊びの楽しさ	子どもがここの人たちと関わるのが楽しいようなので来たいと言っています
	友だちがいるので子どもが来たがる
	折り紙など教えてくれる
	折り紙が楽しいと話しています
地域とのつながり	家と職場の行き来で地域とも関われる場が欲しいから。一人で育児をするとき詰まってしまうから
	子ども食堂について見聞を深めたい
	地域の様子が分かる

普段関わることが少ない地域住民の人や様々な世代の方と関わることができることも、B食堂の良さであると考えられる。

問10-2での「良くしてほしいところ」の回答を表7に記した。B食堂を利用する上での「安全確保」に関する意見、「たまに売り切れの時がある」といった意見があった。高学年の子は体が大きいゆえに、未就学児や低学年の子どもの親からすると、危ないと感じる時があると考えられる。B食堂は予約制ではないので、事前に来場する人数を把握することが難しく、日によっては、売り切れることもあるのであろう。なお、8名(44%)は「特になし」であり、半数弱の母親は現状に満足していると言える。

問11での社会の中で「子ども食堂」は必要だと思いますかについて「はい」が100% (18名)、「いいえ」が0% (0名)であった。普段から、B食堂を利用している子どもの母親全員が社会の中で「子ども食堂」を必要だと認識していることが明らかになった。その背景には、母親自身がB食堂を利用し、「皆で食べられる」ことの良さ、「週1度はご飯を作らなくて済む」ことのありがたさなどを実感していることがあると考えられる。

まとめと総合考察

本研究の主目的は、B食堂を運営しているスタッフと利用している子どもの母親を対象として、利用理由を明らかにすると共に両者

表6 B食堂の良いところ

<p>子どもにとっての良いところ</p>	<p>子どもの遊び相手が誰かしらいる（歳の近い子）。栄養バランスが考えられた食事が食べられる。親同士の情報交換ができる</p> <p>子ども同士でたくさん関わりを持つことができる。</p> <p>普段関われない人から愛情をもらえ教えてもらえることが多い。遊んでもらえる。大人数で食事ができる。</p> <p>友だちと夕飯が食べられるところ。安くて栄養バランスも良いところ。</p> <p>自宅では遅めの時間になる夕食を早めの時間に友だちと食べることができ、バランスの良いメニューもうれしい。</p> <p>「遊ぶことができるのが楽しい」と言っています。普段はできない友だちと一緒に食事ができてうれしそう。</p> <p>地域に住んでる幅広い子ども達と一緒に食事できる。</p> <p>子ども同士楽しく食事ができる場所。苦手な食べ物も頑張って食べてくれる。</p> <p>普段家庭で出さないおかずが食べられる。</p> <p>家では食べない食材でも食べてくれる。</p>
<p>母親にとっての良いところ</p>	<p>親子でゆっくり食べることができる。</p> <p>ボランティアの方が優しい、田舎に帰ったみたいで賑やか。</p> <p>一人での家事育児で行き詰って視野が狭くなってしまいがちな中、週に1回スタッフの方のおおらかな接し方に心を改められる</p> <p>ご飯を作らなくていいので週1回息抜きができる</p> <p>子どもが楽しそう。母親が週1回ご飯を作らなくてよい。気持ちに余裕ができる。</p> <p>毎週開催、長期休暇以外予約せず気楽に来られるところ。季節の行事を内容豊富なイベントとして子どもを楽しませてくださる。スタッフの方々の温かさや人柄の良さ。</p> <p>いろんな世代の方と話したり交流できる。</p> <p>色々な世代の方々とおいしいご飯をいただける。楽しい時間が過ごせる。</p>

子ども食堂の運営スタッフと利用者を対象とした利用理由に関する調査

の意識の違いを明らかにすることであった。表4にスタッフと母親のB食堂を利用する理由、人数、割合を記した。スタッフと母親の群間で、「理由として選択した」と「理由として選択しなかった」の人数について χ^2 検定をした結果、「皆で食べられる」「遊び相手がいる」「ご飯を作らなくて済む」「近所だから」「ご飯がおいしい」「安く食べられる」「スタッフと関われる」「他の子の様子が分かる」「他学年と関われる」の9つについては、有意差は見られなかった（全て、 $p>.10$, *n.s.*）。したがって、これらの理由は、スタッフと母親に共通していたのである。前から5つの理由は、スタッフと母親の約半数以上から選択されていた。つまり、スタッフと母親に共通するB食堂を利用する理由は、「近所であって、子どもの遊び相手がいる、皆で美味しい食事ができ、この日は食事を作らないで済む分、母親が息抜きできる」ことであることが分かった。表6のB食堂の良いところの自由記述回答を見ると、「子どもの遊び相手がいる」「安くて栄養バランスが良い」「地域に住んでいる子ども達と一緒に食事できる」「ご飯を週1回作らなくて良い」といった意見があり、この結果を裏付けていると言える。特徴的な理由は「近所だから」である。表6の回答では、「近所だから」は現れなかったことから、自らが記述する時には思いつかなかったが、

問8の選択肢の中にあるのを見て気がついたり考えられる。つまり、母親は「子ども食堂が近所にある」という利点について普段は意識しないが、実際には利用する理由になっていると言える。また、「安く食べられる」「スタッフと関われる」「他の子の様子が分かる」「他学年と関われる」についても、2～4割強のスタッフまたは母親から選択されており、理由の一因となっていることが分かった。ただし、表7の他学年との交流に関する記述より、「他学年の子どもの遊びが危ない」「大きな子がはしゃいでいる時があり、危ないときがある」といった意見もあったことは留意すべき点である。

「親同士の交流ができる」「家庭環境（一人親等）」についても、同様の検定をした結果、両項目で有意差、有意傾向差があり（順に $p<.01$; $p<.10$ ）、スタッフと母親の回答数に違いがあることが分かった。特に、「親同士の交流」の選択数については、スタッフと母親の間で差が大きく、両者の意識が異なることが明らかになった。つまり、スタッフは親同士が交流している様子を見て、それが理由になっていると感じているが、母親の多くは理由として考えていないのである。「家庭環境（一人親等）」についても、両者の選択数に違いがあり、一定数のスタッフが理由と考えているのに対して、母親の約9割は理由と考え

表7 良くして欲しいところ

遊びに夢中でありあまり食べない。せつかなのでたくさん食べて欲しい。
来た時にご飯が売れ切れの時がある。子どもだけでよいので食べられるとうれしいです。
たまに売れ切れの時がある。高学年が危ない遊びをしていることがあるのでスタッフ皆が叱ってほしい。
子どもと一緒に遊んでほしいが親たちでお喋りしている場になってしまっている。あまり好ましくないと思う。
大きな子がはしゃいでいると危ない時があるので大人の同席が必要かと。お土産のお菓子の品質（原材料・添加物）が心配なものがある。文房具のほうがいいかも。
イベントなどを楽しみにしているので増やしてほしい。

ていないことが分かった。

これらの結果をまとめると、利用する理由について、スタッフと母親の意識の間には多くの共通点があるものの、いくつかの異なる点もあることが分かった。研究1の間9と研究2の間11の「子ども食堂」は必要と思いますかという問いに関してスタッフは91%、利用者は100%「はい」と回答していた。つまり、子ども食堂の必要性に関しては、両者がほぼ一致して必要と考えているのである。したがって、子ども食堂を目的に沿った場所、また、スタッフと利用者にとって安心して利用できる場所にしていく上では、スタッフと利用者が定期的に話し合うなど意見交換をする機会を設け、良い点も改善すべき点も共有しながら運営していくことが望ましいと考えられる。

本研究では、子ども食堂を利用する理由の解明を通して、その機能の一端を明らかにすることができた。先行研究と比べると、より具体的な中身を明らかにすることができた一方でB食堂という一カ所のデータであるという制約があること、子どもの母親を対象とした調査結果である点に留意する必要がある。また、今後は、調査対象とする子ども食堂を増やすと共に調査対象者数も増やし、統計的な検定を用いて、より客観的な結果を得る努力が必要である。さらに、子ども自身の利用する理由についても明らかにする研究が求められる。

引用文献

- 天野敬子 (2016). 子ども食堂を作ろう！明石書店
朝日小学生新聞 (2018). 朝小と「子ども食堂安心・安全向上委員会」が読者アンケート 2018年6

月15日付

- 石井雅幸・上島理歩 (2017). 子ども時代の孤食が大人になっての食への意識にどのように影響するのか 大妻女子大学家政系研究紀要, 53, 61-79.
株式会社インテージリサーチ (2020). 子ども食堂に関する意識調査
厚生労働省 (2020). 令和元年 (2019) 人口動態統計 (確定数) の概況
厚生労働省 (2021). 2020年人口動態統計
町田大輔・長井祐子・吉田 亨 (2018). 実施者が評価する子ども食堂の効果：自由記述を用いた質的研究 日本健康教育学会誌, 26, (3), 231-237.
農林水産省 (2018a). 子供食堂向けアンケート調査集計結果一覧
農林水産省 (2018b). 子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～
NPO 法人むすびえ (2020). こども食堂全国箇所数調査 2020結果のポイント
塩崎尚美 (2012). 親に話せない秘密への理解と対応 児童心理, 951, 104-107.
渡辺弥生 (2011). 子どもの「10歳の壁」とは何か？ 光文社新書
吉田祐一郎 (2016). 子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察—地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて—四天王寺大学紀要, 62, 355-368.
湯浅 誠 (2019). こども食堂の過去・現在・未来 地域福祉研究, 47, 15-27.

付記

本研究は、2020年度卒業生の安原結衣さんの卒業論文の問題部を加筆し、結果を再分析し、新たな考察を加えたものである。本稿の執筆にあたり、安原さんより許諾を頂いた。